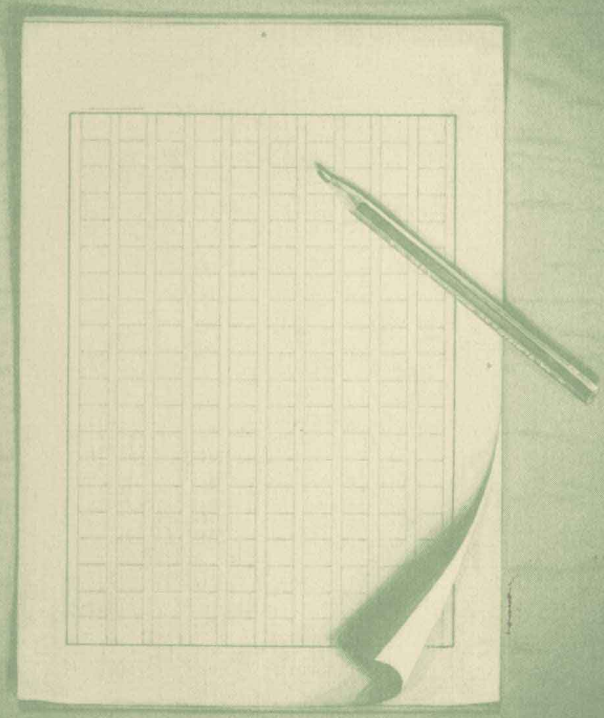
戦争を知らない世代へII ⑪兵庫編

生と死のはざまを生きて

兵庫空襲の記録

創価学会青年部反戦出版委員会



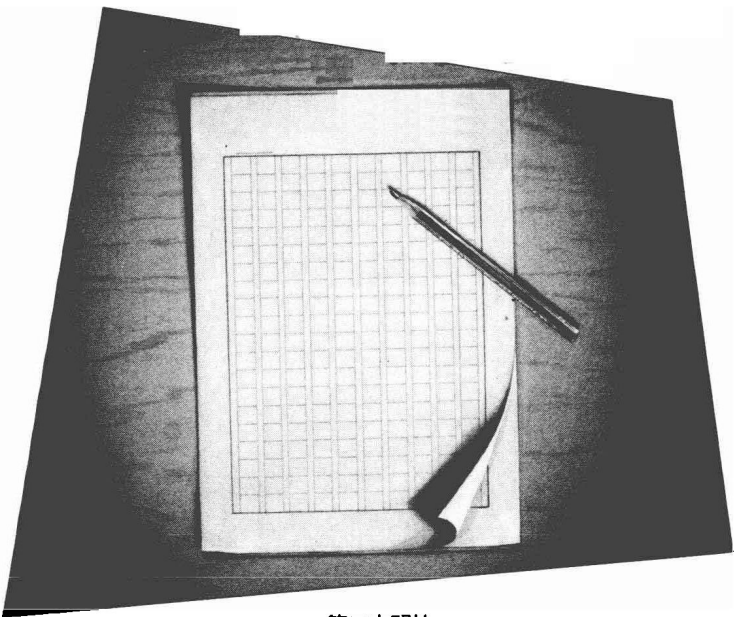
第三文明社

戦争を知らない世代へII ⑪兵庫編

生と死の狭間を生きて

兵庫空襲の記録

創価学会青年部反戦出版委員会



第三文明社

戦争を知らない世代へⅡ⑪兵庫編
生と死のはざまを生きて——兵庫空襲の記録

昭和58年8月15日　　初版第1刷発行

編者©　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　栗生一郎
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号 101　東京都千代田区猿楽町2-5-4
振替　東京5-117823　電話03(294)8731(代)
印刷所　凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り換え致します
1983 Printed in Japan
ISNB4-476-07211-9　C0036

発刊の辞

兵庫県青年部としては初の反戦出版、「生と死のはざまを生きて〜兵庫空襲の記録」が、このたび完成の運びとなった。時あたかも、昭和五十八年八月十五日。この三十八回目の敗戦記念日を前にして、戦後の総理大臣としての初の公然たる改憲論者、中曾根首相の率いる自民党は、参議院選挙に勝利を収め、参院における絶対多数を獲得した。一方、戦後一貫して、「護憲・反核・平和」を唯一の金看板として掲げて戦ってきた社会党は敗北し、その凋落ぶりは目を覆うべくもない。

現代の政治状況を述べるのが本意ではない。ただ、これらのことは、戦後三十八年を経た今日、果して戦後の意識構造というものが、大きく変動したことを物語っているのであろうか。

本書では、兵庫の戦争体験としては特筆すべき、あの東京大空襲をも上回る神戸大空襲の記録を中心として、兵庫の空襲体験四十五本を収録した。

あわせて、神戸市在住の戦後生まれの青年三千名を対象に、「平和に関する意識調査」を実施した。私達の、草の根平和運動をすすめていく上で、戦争体験を継承し、庶民の反戦平和の叫び

を伝えていくとともに、同世代の、戦後派あるいは戦無派といわれる青少年達は、これらの問題について、一体どのように感じているのかを知ることも、重要であると考えたからである。

戦争体験の凄まじさは、戦争を知らない私達に、風化とか空洞化などということを許さぬ迫力で胸に迫り、戦争の悲惨を教えた。体験者の、観念ではない、心の奥底からの強い強い平和への叫びは、取材する側の私達に対して、自己変革を迫るものがあった。

また、私達の行なった意識調査の結果も、大多数の青年は、「戦争絶対反対、憲法擁護、核兵器廃絶」との態度であることを示している。

意識が変わったのではない。その意識を掘り起こすことができるかどうかが問題なのであると私は思う。

戦争の最大の犠牲者は民衆である。民衆の大地に根ざした、民衆の心を心とした平和運動でなければ力とはなりえない。これが、私達がこの運動を通して学んだ最大のものである。創価学会青年部は、永遠に民衆の側に立ち、平和の旗を振り続ける。この一書が、兵庫県青年部に根づいたこの運動の嚆矢となることができるならば、望外の喜びである。

最後に、本書の編集に当たった反戦出版委員会のメンバー、並びに、意識調査の実施に活躍した兵庫県学生部のメンバーに対し、その労を謝したい。

昭和五十八年八月十五日

創価学会青年部　兵庫県青年部長　松本義宏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

発刊の辞

〈特別寄稿〉

空襲、その生と死の記録に寄せて……君本昌久……7

第一章　神戸大空襲

1　昭和20年3月17日

母と共に猛火の海を脱出……上山　茂　16

戦争に引き裂かれた家族……荒木みち　24

憎んで余りある戦争……長谷川恵美子　27

火の海で逃げ場を失った私……木戸千秋　31

私の顔が燃えた……住之江日出男　37

病気の我が子と空襲に追われ……池田艶子　45

空襲下、妻と娘は病に倒れ……日田　昇　50

少年が見たこの世の地獄……横山　昭　56

空襲翌朝、焼け跡に鶏の声……前田あさゑ 61
死なずに生きててよかった……前野一枝 65

2　昭和20年6月5日
川西航空機甲南製作所爆撃……古野文康 72
防空壕でヤドカリ生活……鳥笱尾昭子 76
神戸からヒロシマへ……浅川登美枝 79

3　昭和20年6月5日
白骨と化した父を背負いて……水上美津子 84
煮えたぎる貯水池へ人が……吉浜光代 89
交した言葉が現実に……小西キミエ 93
河原に逃げ込み震えていた……清水まつ子 97
誰も救けられなかった……岩崎恵美子 100
乳飲み子を抱いて焼け跡に……入澤久枝 103
防空壕の暗闇のなかで……武田文子 106
弟を疎開させた翌日、大空襲が……桝井　皓 110

第二章　阪神大空襲

1　西宮・芦屋の空襲

復員した少年兵を待つものは……中野　勇　118
少年兵が父母と別れゆく姿……中山慶子　123
爆撃されなかった別荘地帯……佐藤左一郎　127
我が家に雛祭りなし……神近淑子　130
死の覚悟も吹き飛ぶ恐怖……住本朋子　134
味方に殺された子供達……増瀬冨美子　137

2　川西航空機宝塚製作所爆撃

海軍㋐号作戦秘密会議……重本一晃　141
大工場が跡形もなく……吉田　保　147

3　尼崎の空襲

人間の体を引きチぎって殺す戦争……橋本利夫　154
空襲より怖かった憲兵隊……古川政数　161
空襲で何もかも失った……塩見種枝　167

工場に出てこなくなった友……本田かつ代 170
空襲の最中亡くなった妹……匿　名 174
防空壕に直撃弾が……氏丸きく 180
母を慕って戦火の中を……辻松つた子 184

第三章　明石・加古川・姫路の空襲

1　明石・加古川の空襲

自宅の庭に直撃弾三発……古谷静子 191
赤児を抱いて逃げまどった……成田千佐子 195
息子を背負い娘の位牌を抱いて……井元とし子 202
駅舎を襲った艦載機……鷲尾　操 208

2　姫路の空襲

川西航空機姫路工場爆撃……辻本千代子 214
鉄橋の下に逃げ込んだ……吉野末子 218
荷物を井戸の中に放り込んで……西川文子 220
それまで空襲は知らなかった……三木房枝 223

必死に夜道を逃げまどった……山脇みさゑ　226
編集後記
参考資料　「兵庫県空襲状況一覧表」
特別調査　「神戸市青年の平和に関する意識調査」

（参考・引用文献）

「神戸大空襲」神戸空襲を記録する会編
「神戸空襲体験記・総集編」神戸空襲を記録する会編
「炎の記録神戸大空襲」神戸空襲を記録する会
「郷土の空襲――戦争中の人びとのくらし――神戸編、東播・淡路編、阪神・丹有編、中播・西播・但馬編」
兵庫県学校厚生会
「姫路空爆の記録――恐怖の昼と夜――」姫路空襲を記録する会・編

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

≪特別寄稿≫

空襲、その生と死の記録に寄せて

君本昌久

第二次世界大戦で兵庫県下は、姫路、明石、神戸、芦屋、西宮、尼崎などが空襲の被害を受けた。その空襲は、伊丹、宝塚、相生、三田、竜野、神崎郡香呂まで及んだ。なかでも神戸はひどかった。アメリカ戦略爆撃調査団が終戦の翌年（昭和二十一年）四月に撮影した十六ミリ映画（カラー）「神戸の焼け跡風景」のフィルムは、廃墟と化した神戸を記録してあますところがない。

その神戸は、昭和十七年四月十八日の初空襲を皮切りに、二十年三月十七日、五月十一日、六月五日の大空襲で全滅した。最初の大空襲となった三月十七日は、アラレをともなった北風が強く吹く寒い日であった。B29七十機の大編隊は夜明け前、熊野灘から紀伊半島、土佐沖から淡路島の二コースで神戸を襲った。

爆撃は三時間にわたったが、火は北風にあおられて竜巻のように走り、瞬時にして五百人の死者が折りかさなったといわれる兵庫区の大輪田橋の被害をはじめ、新開地、元町など神戸の西半分が焼失した。

次いで、五月十一日は、三月の東京、名古屋、大阪、神戸と連続した無差別爆撃で焼夷弾を使

いはたしていたため、爆弾を中心とした空襲だった。東神戸の深江にあった川西航空機工場が目標になった。この時、神戸商船大学や灘の警察署、区役所も吹っ飛んだ。

六月五日は、最後の大空襲となった。早朝からB29三五十機による波状攻撃が正午までつづいた。西宮から垂水までの広域にわたって大型油脂焼夷弾三千トンが投下された。街は夕方まで燃えつづけ、神戸の東半分が廃墟となった。その有様は残酷、無残、暴虐という言葉では語りつくせない真昼の焦熱地獄であったという。

アメリカ戦略爆撃調査団報告書によると、空襲による死者は人口三十万人以上の都市で、一千人当り平均二十八・八人とあるが、六月五日の神戸は、一千人当り四十七・四人になっていて、東京、横浜、名古屋、大阪を抜いて全国最悪の死者をだした。

さらに、兵庫県下の都市空襲について印象的な記録をあげれば、六月二十二日の姫路では、二百五十戸の朝鮮人部落が爆弾で吹っ飛んだ。そのなかで鄭さんは首のないのも知らずに、その赤ちゃんを背中にくくりつけたまま逃げまどった。

一月十九日の明石では、川崎航空機工場が爆撃された。その時、動員学徒は五千人もいた。五月十一日の芦屋では、二歳から十歳の子どもたち十五人が防空壕のなかで生き埋めのまま死んだ。終戦十日前の八月五日の西宮では、阪神国道が火の海になった。甲子園球場には墓場のように焼夷弾の筒が六千個も突きささっていた。

そして、七月二十四日の宝塚では、川西航空機工場が爆撃され、女子挺身隊や少年工ら百二十

人が死んだ。現在の阪神競馬場に工場があった。いずれも昭和二十年八月十五日の終戦を迎えるまで、わずか六カ月の空襲であったが、まさしく阪神の街は、夜となく昼となく空襲下の戦場になり、人や町が奪われた。

B29による無差別爆撃はどんなものであったかといえば、二十年二月までの空襲は、ハンセル指揮官による軍需施設に限っての爆弾攻撃だった。それでは効果があがらないとして、カーチス・ルメイ指揮官に代り、無差別爆撃となった。つまり、民家と非戦闘員を区別することなく、焼夷弾で火攻めの空襲を開始した。

そのために、事前に偵察を行い、一時間に五千枚の写真を撮り、あらかじめ各都市の精密地図をつくりあげていた。また、気象条件についても調査し、冬には北西の季節風が、夏には南西の季節風が吹き、この風がB29の飛行を助け、同時に空襲による火災の相乗効果をあげることを計算していたので、無差別爆撃のスタートを〝春一番〟が吹く、三月十日の東京大空襲からはじめていた。そのB29は〝空飛ぶ要塞〟といわれ、日本の戦闘機も高射砲も迎え撃つことができなかった。

当時の市民にはそんなことはわからなかった。ツンボ桟敷におかれていたのだから、わかる手だてもなかった。日本は神の国だ、万世一系の現人神（あらひとがみ）（天皇）の国だから、鬼畜米英に侵入されることはないと、おやじもそういい、学校の先生もそういい、お上（政府）もそういい、ひたすら〝撃ちてし止まん〟にいそしんだ。焼夷弾なんか、濡れたムシロや火タタキで消せる、砂をかけたら消せると教えられて、誰も文句をいえなかった。

ともかく、昭和十七年の防空体制は〝押入れか床下にもぐれ〟であった。十八年になると〝防空壕を掘れ〟となり、十九年には〝疎開〟を命じ、工場、駅、学校周辺の密集家屋の取り壊しをはじめた。そして空襲が激しくなった二十年になると、逃げてはいけない、逃げる者は〝非国民〟となり、世間に顔むけができなくされ、やがて本土決戦、一億一心〝火の玉〟で死守せよ、というところまで追いつめられる恐ろしい時代になった。

だから、市民は焼夷弾を消そうとして、自分の家が焼け落ちるまで防火につとめていた。しかし、もうどうにもならないと、炎をくぐって逃げようとした時には、あたりは火の海に取り囲まれて絶体絶命になった。避難した防空壕はむろんのこと、炎は竜巻のようにうず巻き走った。その炎は人が走るスピードよりも何倍も速かった。街のいたるところで焼死体となった犠牲者は、このようにして逃げ遅れた人たちであった。

その空襲犠牲者は銃後にいた婦女子だった。男たちは、ある日突然、赤紙の召集令状で戦地へ行き、留守宅には女と子ども、それに老人しかいなかった。そのことは空襲体験を語り、書いた人たちが殆ど女性で占められていることからもうなずけよう。それに、工場の爆撃で死んだ動員学徒のことも忘れてはならない。

しかし、戦争のツケを回されて死んだ空襲犠牲者について、国（政府）は〝戦歿者〟といわないで〝罹災者〟と呼んだ（ここのところは検定教科書問題になった侵略を進出と書き変えていることと同じである）。つまり、空襲は天変地異と根本的にちがっているにもかかわらず、天災扱いしている

のだ。市民は竹ヤリと防空頭巾で国のために殉じたのに、仕方のないこととして切り捨てご免になっている。天災を防ぐすべは経験によって知ることはできても、戦争の犠牲をなくすコツはないのだから、なんと情なく憤懣やるかたない話ではないか。

戦後も三十八年になった現在、戦争を知らないのは若者だけではなく、父や母や先生になった世代にまで及んでいる。そして空襲の傷痕は、都市からキレイさっぱり消え去ったように見えるが、いまふたたびの戦前——戦争の危機と不安感は、世界的に反核草の根運動となって高まっている（それでもレーガン米大統領は核戦争に勝ち抜こうと頑張っている。かつての日本の〝欲しがりません勝つまでは〟と似てはいまいか）。

それにもかかわらず、日本はアメリカの軍事予算の要請によって戦力を独走させている。だが、目下進行している核兵器は、かつてのB29の空襲とは較べものにならない破壊力を持っている。その時、死ぬ者は誰なのか。日本の、アメリカとの軍事的共同作戦が明瞭となった現在、基地攻撃、つまり、ミサイル攻撃を受けることを覚悟しなければならない。それを防衛するのは、GNP一パーセントを突出させた軍備で守れるというものではない。

もしも、米ソ両大国による核戦争が起った場合、世界中で五億から十五億の人類が死滅し、日本でも国民の三十パーセントから八十パーセントまで犠牲が出るといわれている。その核戦争というのは、ある朝、目をさますと戦争になっていたというものではなく、何もかもいっぺんに吹っ飛んで消滅しているのだ。その時、日本の軍備が一人一人の生命を守ってくれるという保証は

ない。いわんや、核シェルターなんて防空壕と五十歩百歩で、かつての空襲で身に痛いほど経験しているからわかる。鉄の溶ける温度は一千五百三十六度、ヒロシマの原爆爆心地の温度は、三千度から四千度であったから、人も、物も、瞬時にして灰に近い状態になったことを忘れてはならない。

私たちは、空襲で死んだ者の数字にだけなれっこになっているが、ヒロシマでの一発の原爆で死んだ二十万人というのは、遺体を五十センチのスペースに一体ずつ並べていけば、なんと百キロメートルの距離になる。とても一日では歩けない。その空襲の炎のなかで人びとはどんな思いで死んでいったか。また、九死に一生を得た体験者が何十年にもわたってどんな悲しみを背負わされて生きているか。その生と死のはざまの証言記録を歴史の教訓として知らねばならない。戦争というのは、昔も今も、全世界に何億という胸がつまるような不幸な人びとをつくったのだから。だから、またふたたび人間の肉声のきけない数字（死者）にしてしまっては、それこそ戦争犠牲者の幽魂をよみがえらせることはできなくなるのではないか。そこのところを深く銘記していただきたい。

（「神戸空襲を記録する会」事務局長）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com